

金時山麓（南足柄市）で発見されたモリアオガエル

新井 一政

Kazumasa Arai : A Forest Green Frog, *Rhacophorus arboreus*, Found in the Foot of Mt. Kintoki, Minamiashihigara-shi, Kanagawa Prefecture

はじめに

1996年7月4日、南足柄市の金時山で昆虫調査を実施中であった神奈川県立生命の星・地球博物館の荏部治紀学芸員が、林道脇の人工池(雨水調整池)の上に張り出した樹枝に白い泡状の塊を発見し、同行の高桑正敏学芸員が、モリアオガエル *Rhacophorus arboreus* の卵塊であることを確認した。報告を受けた筆者は、7月7日に現地調査を行い、本種の卵塊および幼生多数を認めたのでここに報告する。

棲息確認場所および状況

今回、モリアオガエルの棲息(繁殖)が確認された場所は、箱根火山の寄生火山にあたる金時山の北西側斜面で、南足柄市地藏堂の南約4km、南足柄市外五市町組合地内に設置された明神林道の明神橋北東側、標高600mの地点である(図1)。

確認できたのは1卵塊のみで、林道脇に設けられたコンクリート製の雨水調整用の人工池(図2、以後池という)の上、約70cmの所に張り出したコゴメウツギの枝に産卵されており、発見時にはすでに孵化した幼生の落下が終了し、原形をとどめない程に崩れていた(図3)。

池は南側が林道に面し、他の三方向を広葉樹の二次林で囲まれているが、すぐ近くまでスギ、ヒノキの造林地が迫っている。池の大きさは、一辺が約2mの方形で底には土砂や落ち葉が堆積し、水深は10~40cmである。水は透明で、中層に浮いていたり池の底で摂食中の本種の幼生(オタマジャクシ)約80個体が目視できた。

幼生の全長は約2~3cmであり(図4)、発育にややばらつきがあるように思えた。また、尾部が切断された幼生が複数含まれていたことと、池中

で幼生を捕食中のサワガニ1個体が観察されるとともに、ヤブヤンマとタカネトンボの幼虫(荏部治紀学芸員の同定による)が採集されたことから、これらがモリアオガエル幼生の捕食者であると考えられる。

その後の経緯

7月31日に再度現地を訪れたところ、幼生は順調に成長して後肢が生え揃い、全長5cm程になっ

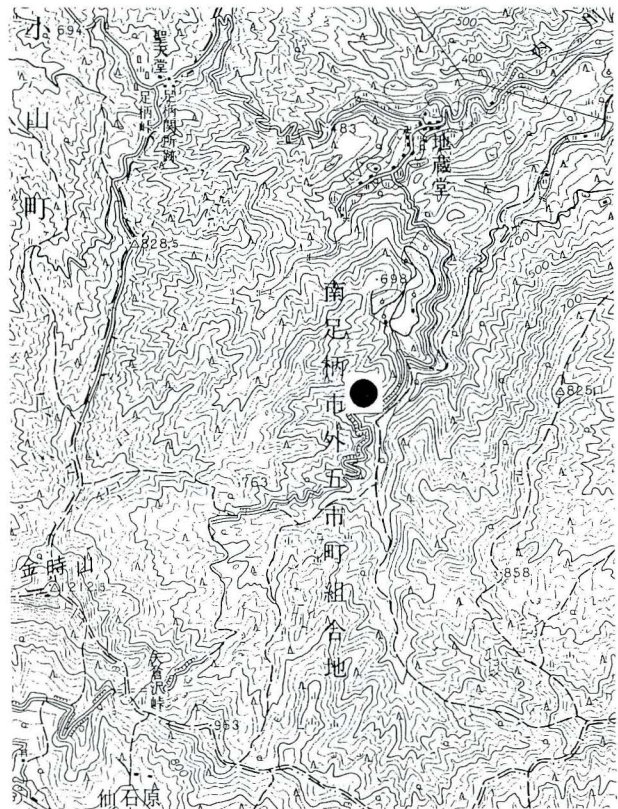


図1：卵塊および幼生の確認場所(図中の●印)
国土地理院発行5万分の1地形図「小田原」を使用

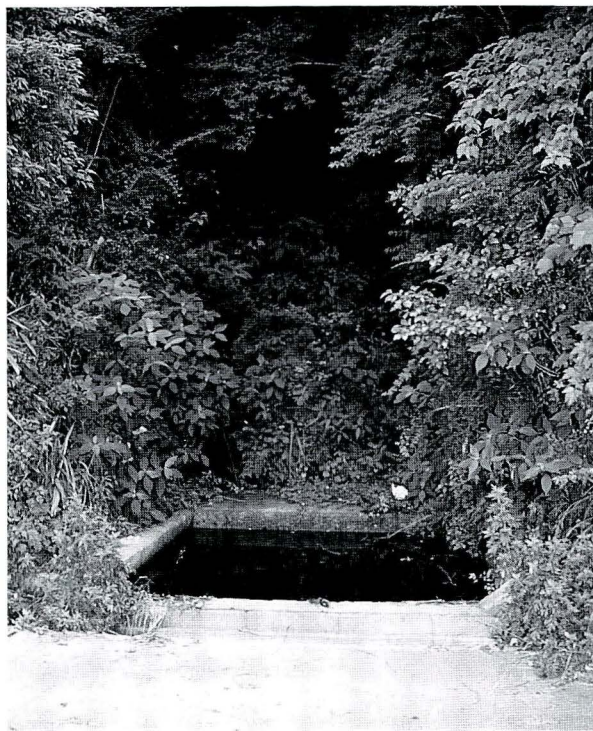


図 2 : 卵塊および幼生確認場所の環境



図 3 : コゴメウツギの枝に産卵された卵塊

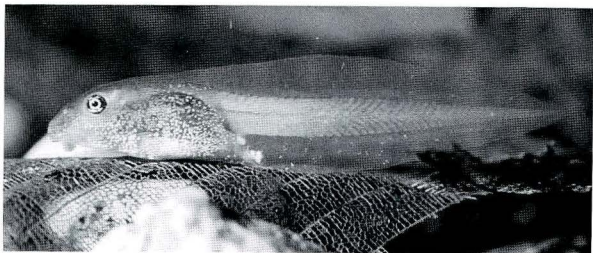


図 4 : 卵塊下の池で確認されたモリアオガエルの幼生

ていた。この時期、箱根地方には降雨がほとんど無く、池の水は薄い褐色に変じて水量も発見時より10cm程減じていたが、目視により約50個体が確認できた。幼生は、周囲の樹木によって生じた日陰部分に集中し、表層に浮いて静止している個体が多かった。

その後、8月10日の調査では池中に幼生の姿は認められなかった。池の状態は前回の調査時と変わらないことから、幼生は変態を完了して上陸し、分散したものと考えて周囲の林内を探索したが、幼体(子ガエル)の姿は確認できなかった。

県内のモリアオガエル分布の疑問点

今回、南足柄市の金時山中腹で成体は未確認ながら卵塊と幼生の存在が確認されたことで、現時点での神奈川県内のモリアオガエルの確実な生息地は、同所のほかに藤野町(新井, 1983)と鎌倉市(新井, 1994)の3か所となった。しかし、図5にみるように、それらの生息地はいずれも遠く離れている。さらに、浜口(1995)は、藤野町のモリアオガエルは、自然分布であるのか人為的に持ち込まれたものであるのかはやや疑問が残る、との見解を示している。鎌倉市の本種についても、人為的に持ち込まれた個体がもとになっている可能性もあり、現時点では在来の個体群とは断定できない(新井, 1994; 岡田, 1994)。

今夏の金時山での本種の発見も、先に示した1卵塊が確認されたのみである。また、明神林道には、発見現場と同様の人工池が他にも6か所存在するが、常に水が溜まっている状態ではなく、筆者の調査ではいずれの場所からも成体、卵塊、幼生共にその存在の証拠が見当たらなかった。さらに、新井が行った地藏堂地区での聞き取り調査で

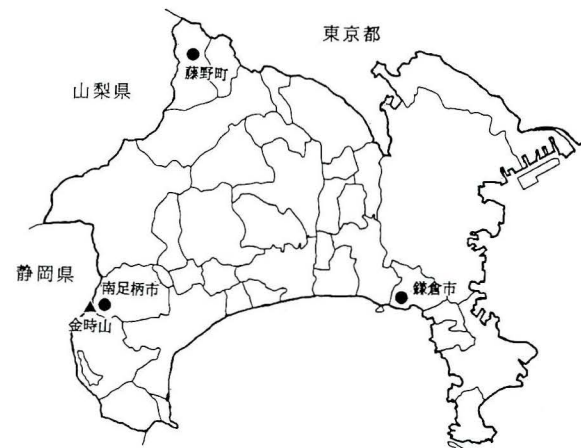


図 5 : 神奈川県におけるモリアオガエル生息地

も、モリアオガエルの生息に関する情報は得られなかった。

繁殖期、水面上に張り出した木の枝に産みつけられた本種の乳白色の卵塊は遠くからでも良く目だつ。もし、モリアオガエルが箱根の在来種であったとすれば、今まで人目にふれなかったこと自体が不自然であるとの考えも成り立ちうる。

しかし、藤野町および鎌倉市の生息地が市街地や人家の周辺部であるのに対して、金時山のそれは一番近い人家からでも直線距離で2 km近く離れており、人為的な移入種であると結論づけるのは早計であろう。

おわりに

大野(1975)は、過去における神奈川県下のモリアオガエル生息地として報告された、足柄下郡箱根町(岡田・河野, 1924)、三浦郡神武寺山(並木, 1935)川崎市東生田滝沢池(高橋, 1958)について、その記録の不確実性を指摘している。特に高島・田代(1968)は、箱根からの本種の記録は抹殺しておくことが妥当のように思う、と指摘するとともに、柴田(1990)も、丹沢山塊での生息の可能性はなきにしもあらずとしながらも、箱根では田代道彌氏が精査の結果、モリアオガエルの生息は認められなかったとしている。

しかし、本文をまとめるにあたって田代道彌氏にモリアオガエル発見をご報告したところ、氏は「やっぱりいましたか。」との感想を述べられるとともに、人為的な移入種説を言下に否定し、隣接する静岡県での本種の分布状況から在来種であり、かつ新発見である可能性を示唆された。

氏によると、過去における箱根のモリアオガエルの記録には生息地が記載されていないなどの不確実な点があり、その後、箱根地域から本種の確実な発見例が無いために箱根産両生類リストから外した、とのことである。

今後継続的に調査を実施し、県内におけるモリアオガエルの分布について、何らかの結論を得たいと考えている。

謝辞

神奈川県立生命の星・地球博物館の樽 創学芸員には池の存在に関する情報を、また、同館の荻部治紀、高桑正敏両学芸員並びに神奈川県昆虫談話会の平野幸彦氏は、モリアオガエルの卵塊発見の情報を提供いただいた。神奈川県自然環境保全審議会委員の田代道彌氏、箱根町立森のふれあい館の石原龍雄学芸員からは、本報告をまとめるにあたって有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表する。

参考文献

- 新井一政, 1983. 藤野町で発見されたモリアオガエルについて. 神奈川自然誌資料, (4): 56-59.
新井一政, 1984. モリアオガエルの発見. かながわの自然, (46): 18-19.
新井一政, 1994. 鎌倉で発見されたモリアオガエル. かながわの自然, (56): 21-23.
浜口哲一, 1995. 両生類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書, 133-136.
並木秋人, 1935. 山蛙. 動物文学, (8): 19-25.
松井孝爾・柴田敏隆, 1964. 丹沢の爬虫, 両生類. 丹沢大山学術調査報告書, 355-358.
岡田弥一郎・河野卯三郎, 1924. 日本産アマガヘルの二新変種とその生態的分布. 動物学雑誌, 36: 104-109.
岡田泰明, 1994. モリアオガエル補記. かながわの自然, (56): 23.
大野正男, 1975. 千葉県指定天然記念物清澄のモリアオガエル保護増殖事業報告書, (Ⅱ): 1-40.
柴田敏隆, 1990. 丹沢大山国定公園の両生・爬虫類. 森と湖のふろさと整備計画策定調査報告書(丹沢地区自然環境現況調査), 29-35. 神奈川県.
高島春男・田代道彌, 1962. 箱根の両生・爬虫類. 神奈川県博物館協会会報, (9): 18-20.
田代道彌, 1989. 動物. 南足柄市史資料編自然, 191-242.

(神奈川県立生命の星・地球博物館)